

たからやちよ

(佐山のしし舞)



2021. 7. 1
(令和3年)



昔の人は「しし」という動物に踊りをさせて願い事を叶えようとしてきました。しし舞の「しし」はライオンではなく、「竜(りゅう)」などと同じように現実には存在しない想像上の生き物のようです。しし舞は1000年以上前に中国から日本に入ってきたと言われていています。当時の人々はこれまで見たことのない「しし舞」を見て、大変な刺激を受けたことと思われます。このことが遠くの国から来たふしぎな「しし」をいつのまにか「悪いことを打ち払うもの」と思わせ、江戸時代には全国に広がっていくことにつながりました。

全国に広がっていくうちに、ある村では作物の実りを豊かにするために雨が降るように願い、またある村では暴風を止めるように願う、といったようにしし舞に願う内容も村によって変わり、しし舞の舞い方、形もその村独自のものへと変わっていきました。しし舞は各地によって異なりますがその種類は大きく分けて二つの種類があります。

①二人立ちのしし舞

一匹の「しし」に二人で前足と後足になって舞います。
一般に「しし舞」と言われるものです。



②一人立ちのしし舞

一匹の「しし」を一人がかぶって舞います。しし舞の数は複数で特に東日本では三匹が多いですが、中には九・十三匹で舞うものもあります。



八千代市内ではかつて10か所でしし舞があったことが確認されていますが、現在では「佐山のしし舞」と「勝田のしし舞」の2件のみとなり、たいへん貴重なものなので市の指定文化財になっています。今回は「佐山のしし舞」について説明します。

佐山のしし舞は毎年9月23日のお彼岸の中日に穀物が実り多くなることや悪い病気を打ち払うことを願って、午前からお昼にかけて熱田神社で、夕方には妙福寺で行われます。このことから「ヒガン（彼岸）ジシ」とも言われます。



佐山のしし舞は江戸時代に始まったと言われてはいますが、はっきりした記録はなく、およそ300年以上前ではないかと地元では伝わっています。



オヤジシ（右）、ナカジシ（左）、メジシ（中央）

「しし」は「オヤジシ（親獅子）」、「ナカジシ（中獅子）」、「メジシ（女獅子）」の三匹です。「しし」の頭は木で作られていて、黒く塗られた上に赤や金で目鼻が描かれています。また、頭には山鳥の羽を付けています。そして踊る人の腰には太鼓を付けて、手には20センチほどの長さのバチを持ちます。しし舞は、三匹が一緒に入場

し、始めは一緒に舞っていますが、オヤジシとナカジシがけんかをし、始めのうちはナカジシが勝ちますが、その間メジシはそこから離れたり、見ていたりします。最後には仲直りをして三匹が一緒に退場して終わりとなります。

舞い方には「オオガカリ」と「カコイ」という2種類があり、必ずセットで舞われます。オオガカリは足がつま先から入るので、腰を高く上げる動きをします。カコイはかかとかから付けるので重心を低くする傾向があり、オオガカリの「動」に対し、カコイは「静」というイメージがあります。

佐山のしし舞は何百年も失われることなく、地域の人たちの手により長い間守られてきました。この貴重なしし舞を失うことなく守っていくためには、これからの時代を担っていく皆さんたちのような若い人たちの協力が欠かせません。



編集・発行
八千代市教育委員会
文化・スポーツ課文化財班
〒276-0045
八千代市大和田 138-2
電話 047(481)0304